

小村雪岱の装幀や挿絵における文学表現とその背景

大阪芸術大学 文芸学科 特任教授 真田幸治

【研究の目的】

本研究は、私が編者として刊行した『小村雪岱挿絵集』（幻戯書房、2018年）の成果や、『日本古書通信』における「小村雪岱の知られざる雑誌表紙絵」（2017年9月～2023年7月の間に38回発表）および「小村雪岱の雑誌目次絵」（2024年11月～2025年2月の間に3回発表）といった、これまで行ってきた小村雪岱〔1887-1940〕の商業美術分野における雑誌表紙絵や挿絵に関する実証的な研究を基に、更なる発展を目指すものです。

加えて、書物の装幀や雑誌の表紙絵、そして挿絵を担当した際に雪岱が使用した〈雪岱文字〉という独自の複数の描き文字のスタイルが、雪岱の商業美術におけるアプローチにおいて絵と同等に重要な役割を果たしていたという視点として取り入れ、書物や雑誌のデザインにおける重要な構成要素であったことを複合的に研究します。

さらに、同時代の装幀家や挿絵画家の仕事にも注目し、特に雪岱と同様に商業美術に対して独自の視点を持ち、アプローチしていた画家たちを取り上げ、その作品を通じて、現代的なデザインの視点に通じる描き文字のスタイルがどのように定着していったのかを通時的に検証することを目指します。

【これまでの研究成果について】

〈雪岱文字〉については、拙稿「『雪岱文字』の誕生——春陽堂版『鏡花全集』のタイポグラフィ」（『タイポグラフィ学会誌 08』タイポグラフィ学会、2015年9月）で論じたように、雪岱が商業美術を手がける際、日本画を出自とする絵だけでなくその描き文字〈雪岱文字〉にも重要な意義を置いていたことがわかります。特に春陽堂版『鏡花全集』全15冊（大正14年～昭和2年）の函における意匠では、各巻の収録作品のタイトル文字を表現するために〈目次式意匠〉を用いて全1082字にわたる〈雪岱文字〉を描き上げています。

さらに、この論考では〈雪岱文字〉を描く際に雪岱が参考にした書籍についても取り上げ、その書籍に関する証言が長年誤解されてきたことも指摘しました。具体的には、雪岱の弟子筋の山本武夫が述べた「雪岱の装幀は文字だけの場合もあった。『多情仏心』（里見弴著）上下がそれである。書体は宋朝体による木版活字が参考になっていて、中国の『寒山詩集』という本の複製本が審美書院より出版されていた。縦長の字で、縦線より横線の方がやや細目で、撥ねる処、抑える処に特長がある。雪岱はこの書体を一貫して使っていたことになる。」（「小村雪岱の人と作品」『小村雪岱』形象社、昭和51年）という証言があります。

山本の証言によれば、雪岱は「審美書院より出版されていた」中国の『寒山詩集』という本の複製本を参考にして「縦長の字で、縦線より横線の方がやや細目で、撥ねる処、抑える処に特長がある」「宋朝体による木版活字」の「書体を一貫して使っていた」と述べています。しかし、この証言を実際に雪岱が手がけた装幀本や雑誌

のタイトルロゴと照らし合わせてみると、一部合致しない点があることが分かり、証言のさらなる検証が必要であることが明らかになりました。

その後、〈雪岱文字〉をタイトルロゴに使用した雑誌『郊外』第8巻第2号（郊外社、昭和2年2月）の編集後記に記された「本号の表紙の文字は、小村雪岱画伯が、宋版の理修経の文字を選んで書いて下さったものです。」という証言を発見しました。この証言により、新たな〈雪岱文字〉の参照元が明らかとなり、従来言われていた『寒山詩集』一冊だけではないことが分かりました。現在も新たな証言を求めて調査を続けていますが、現時点では新しい証言の発見には至っていません。

【今年度の主な研究成果について】

大正13年（1924年）に大日本雄弁会講談社（現在の講談社）が創刊した大衆雑誌「キング」の登場をきっかけに、多くの出版社が大衆雑誌を創刊し、その結果として挿絵画家たちの活躍の場が飛躍的に急増しました。この流れの中で、雑誌の顔となる表紙においても新たな表現方法が生まれました。

絵のみならず、タイポグラフィ（文字のデザイン）にも注目が集まり、大正期から昭和初期にかけて、現代のブックデザインに通じる視点を持つ作家たちが現れました。雪岱もその一人であり、日本画家でありながら、タイポグラフィの重要性を認識して新たな表現に挑んだ装幀家であり挿絵画家でした。本研究では、雪岱と同じ視点で雑誌の表紙や書籍の装幀にアプローチした版画家の恩地孝四郎（1891-1955）についても並行して取り上げます。

今年度の研究成果としては、昭和6年に河井醉茗によって創刊された「女性時代」（女性時代社）の恩地による表紙絵とタイトルロゴのデザインを検証しました。その結果、雪岱のタイポグラフィへのアプローチとは異なる新しい表現が確認できました。雪岱が日本画を出自とする絵と中国の書籍を参照して独自の〈雪岱文字〉を用いてタイトルロゴを描いたのに対し、前衛的な感覚の恩地は、創刊から長期間にわたって直線や曲線、円、三角形、長方形といった幾何学的図形を用いて、抽象的な表現の絵を表紙に描き、その絵と一体化する形でタイトルロゴを描いていました。

「女性時代」の表紙に使われた漢字のデザインでは、太い縦線と細い横線が組み合わせられ、各ポイントに正円が配置されており、その円が抽象的な表現による表紙絵との一体化を促しています。

次年度の研究では、雪岱と恩地がそれぞれ雑誌の表紙のために描いたタイトルロゴの文字に、絵の画風がどのように影響を与えたのか、絵と文字の相関性についてさらに実証的に検討を進め、雑誌表紙デザインにおける絵と文字の関係性を解明していきたいと考えています。